

わおと子どお

北海道算数数学教育会
小学校部会 札幌支部
平成 21 (2009) 年 7 月 27 日発行

No. 145

問題解決学習への教師のかかわり

北数教札幌支部副支部長

札幌市立東札幌小学校長 飯塚 泰久

朝の挨拶をしていると、子供たちの表情はさまざまである。笑顔の子、いやなことがあったのか不機嫌そうな子、明るい元気な声の子……。

そんな子供たちを見ながら、学校に来る足どりが軽く、「算数はたのしい。好きな勉強だ！」「今日は算数がある。昨日の続きを早く考えてみたいな。」とワクワク、ドキドキしながら学校の門をくぐる子供たちを願い、教師のかかわりを考えてみたい。

1. 子供の意欲の形成

我々の実践の出発点は、子供たちをひきつける授業を創っていくことから始まる。そこで、まず大切にしたいのが授業の導入である。「これから何を学習するのか」と興味をもたせ、「今日の課題はこれだ」と意識させ、「やりたい」「できそうだ」という、意欲がもてる場面を創りたい。子供自らがやりたいと思わなければ、意欲はわいてこないわけだから、導入の工夫によって魅力ある授業づくりになっていくのではないかと思う。

また、課題を子供自ら発見する場合でも、与えられた課題に当面する場合でも、教師の働きかけ—発問・質問—によって子供がより思考をめぐらせたり、子供の活動をより促したりすることになる。発問には大きく二つあると言われている。

一つは「閉じた発問」。発問の答えが「はい」「いいえ」で答えられる場合をいう。既習で学んだ知識なり、経験してきたものを問いかけていく発問である。

もう一つは「開かれた発問」。子供自身に答えをつくりださせ、次の活動や思考につながる発問である。

発問・質問の工夫によって、子供たちに多様な考えを引き出し、活かし、高めていくことにつながる。さらによりよい仕方を求め続けたり、その過程で友だちの考えなどを学んだりする活動を促すことにもなる。

2. 問題の追求

先輩から、教わった話。

「教材と子供をどう格闘させるかがポイントである。化学でいう触媒の役割を教師が果たすべきである。教師と子供とがとっくみあって反応しあうのでない。教材と子供が反応しあわなければいけない。教材と子供の反応を促進していくのが、教師の触媒の役割なのである。」と。

子供の知的な興味や関心呼び起こし、積極的な学習活動を促し、子供にとって生きてはたらく知識、技能及び学び方や態度などの習得が行えるよう教材を選択し、組織していく工夫が必要である。

子供たちは質の高い課題に対してそれぞれの思い思いの着想や手立てをもって苦心しながらも、一定の結論(考え)を出す。しかし、それで終わりではない。複数の考えを関係付けることや複雑で分かりにくい手続きや証明を簡潔で分かりやすいものに改めたり、一般化したり特殊化したりする学習を楽しむ子供たちに育てたい。結論にいたるまでの過程を追い求めることを大事にしたいものである。

7月の『夏の学習会』での学びを活かし、11月の支部研究大会では、子供自身が学習の対象へ迫っていき、「みんなで学ぶ楽しさを実感」「自分のよさ・友だちのよさを実感」する子供を育てる授業づくりをしていきたいものである。